

平和記念だより 101

2026年10月

◆編集・発行/高松市市民局人権・男女共同参画推進課 高松市平和記念館
◆連絡先/〒760-0068 高松市松島町一丁目15番1号 たかまつミライエ5階
TEL(087)833-2211 FAX(087)833-2244

高松空襲展

令和8年度の平和啓発事業企画展のスタートとして、6月26日(金)～7月6日(月)に高松空襲展「忘れてはならない、過去の惨禍」を開催しました。今回は“繋ぐ”をテーマに、空襲直後の惨状がわかる写真や市民が逃げ惑う様子を描いた絵画に加え、高松空襲の爪痕を今に残している遺構5点の紹介パネルなど、約30点を展示しました。また、DVD「高松空襲6人の証言」の放映や、VRゴーグルを使っ



た『原爆投下前後の広島』の映像体験のほか、新たに来場者に平和について考えてもらうための高松市のロゴ「TKMT」を頭文字にした「平和のメッセージ」の作成コーナーを設け、平和意識の一層の高揚を図りました。さらに、特別イベントとして、高松空襲のあった7月4日と同日に、たかまつミライエ6階の学習研修室で、高松空襲を

語り継ぐ若い世代の育成を目的に「忘れないために、いま聴く」と題して、県内の学生を対象に高松空襲体験者との交流会を実施しました。少人数での開催でしたが、体験者と対面で、当時の厳しかった生活や平和への思いなどを聞くことのできる貴重な機会になったとの感想をいただきました。



空襲展の来場者の方々から、「家から南にある栗林公園の方へ逃げる予定だったが、逃げ遅れて、市役所の前の学校の防空壕に逃げた。それが結果的によかって生き延びた。」「鶴市町から、広島に原爆が投下された直後のきのこ雲ができる光景が見えた。」などの体験談を聞くことができました。ご来場の皆様、ありがとうございました。

参加者アンケートより ご協力ありがとうございます！

日本各都市で空襲があったとの理解はしていましたが、この高松も同様に焼野原になったことを知ることができました。今も世界中で紛争があり、同じ状況があると思うと悲しく思います。戦争だけはしない国であってほしいと思います。

他県の生まれですが、四国4県どこも同じ状況になっていたんだと思うと胸が痛いです。自分の両親も戦争体験者ですがもう亡くなっているので、もっとこの時代のお話を聞いておけばよかったと思います。

7月～8月に平和啓発事業各企画展・教職員のための平和教育講演会を開催しました。

高松市戦争遺品展

- 開催場所：瓦町 FLAG 2 階 コンコース
- 開催期間：7月10日（金）～7月16日（木）
- 展示内容：戦争に関する写真・パネル・資料等



今年、当館が開館10年になることから、これまでの遺品展10年を振り返る企画としました。この10年間に、約200名の提供者の方々から2千点に及ぶ戦争遺品が寄せられ、そのひとつひとつが戦争を語っています。その中から、終戦後に極寒の地、シベリアでの拘留当時を詠んだ「シベリア拘留の短歌11首」など、10のテーマに沿って展示しました。

教職員のための平和教育講演会

- 開催場所：高松市平和記念館
- 開催日：7月27日（月）
- 内容：高松空襲・太平洋戦争に関する講演



本館職員が、映像やパワーポイントを使って、高松空襲の状況をはじめ、兵庫・岡山における空襲の詳細、焼夷弾の説明や戦争に関わった人たちの記録などについて説明しました。講演会後半は平和学習担当職員が本館の平和学習の目的や内容とともに、展示室の資料について説明しました。

原爆パネル展

- 開催場所：瓦町 FLAG 8 階 IKODE 瓦町展示コーナー
- 開催期間：8月4日（火）～8月10日（月）
- 展示内容：原爆関連絵画
核兵器と戦争に関する16の問いのパネル



高松市平和を願う市民団体協議会と共催。核兵器廃絶を訴えるため、広島市の被爆体験証言者からの聞き取りをもとに広島市立基町高校の生徒が描いた絵画20点を中心に原爆関連資料を展示しました。併せて、核兵器と戦争に関する「16の問い」から平和を啓発するコーナーを設けました。

証言 高松空襲

あの日わたしは

証言⑪ 高橋久視さん

証言者プロフィール

■当時 香川師範1年生

奉護係いうて、奉安殿の中の御真影（天皇・皇后陛下の写真）を負う連中が決まっていて、級長だったかな、成績の良い者でなかったらいけなかった。級長がそれをリュックサックを背負うようなひれ帯で背負って、師範学校の周りの幅1mもない溝を御真影を背負ったまま飛び降りた時、ひもがぶつんと切れた。これはいかんでないかと、みんなで抱えて逃げた。駅の横を通過して（大の場の）海の方に逃げた。向こうの（南の）方では、（爆弾を）パッパ、パッパと落としていた。一応空襲が終わって3時ころでしょうか、焼くところを焼いて（アメリカ軍も）安心したのでしょうか、その頃になってやっと日本の防空隊が機関銃みたいなもの（高射機関砲）を撃っていたが、全然あたらなかった（全く届いていなかった）。

「あの日わたしは 高松空襲～当時を伝える証言者の声～」(高松空襲を子どもたちに伝える会)証言映像より編集

平和映画☆上映会のお知らせ

平和記念館映像学習室において、次のとおり平和映画を上映します(無料)。

10月の上映 「一つの花」(23分)

日時▶ 開館日の土・日・祝日、午後1時～
 解説▶ 「一つだけちょうだい。おにぎりちょうだい。」
 ねだって泣き続けるゆみ子に、戦場に向かうお父さんは駅に咲くコスモスの花を一本とって「さあ一つだけあげよう。一つだけの花、大事にするんだよ。」と言って列車に乗る。懸命に生きようとした家族の姿を描くアニメーション。



11月の上映 「ガラスのうさぎ」(83分)

日時▶ 開館日の土・日・祝日、午後1時～
 解説▶ 母と二人の妹の命を奪った東京大空襲。焼け跡から猛火により変形した「ガラスのうさぎ」を掘り出した敏子は、死んでしまった家族のためにも、平和な世界の実現を願いながら、たくましく生きていくことを決意する。多くの人に読み継がれるベストセラーが原作の長編アニメーション映画。



12月の上映 「お星さまのレール」(76分)

日時▶ 開館日の土・日、午後1時～
 解説▶ 1940年、朝鮮の新義州ですくすく育つ主人公チコ。日増しに激しさを増した戦争は、やがて日本の敗戦で終わる。そして、日本への引き揚げの逃避行が始まる。小林千登勢さんの実体験を描いた児童文学が原作。



※ 都合により、上映作品・期間等を変更することがあります。

▽今後の行事予定△

11月

● 高松市戦争遺品等収蔵品巡回展

期 日 令和8年11月21日(土)
 場 所 吉光文化センター
 内 容 寄贈された戦争遺品や高松空襲に関する資料等を展示

● 平和記念館開館10周年記念展

期 日 令和8年11月21(土)・22日(日)・23日(祝・月)
 場 所 高松市平和記念館
 内 容 高松市平和記念館の10年の歩み

※ 都合により、開催を中止・延期する場合があります。



収蔵品
紹介 91

防空の心得

寄贈者 鳴海 安義 様

防空必勝の誓

寄贈者 林 敏樹 様

防空法の成立・施行に伴い、防空上の行動指針や心得を示したもの。

「防空の心得」では、警戒警報と空襲警報の各々における灯火管制の内容、屋内外の電灯の遮光方法などを絵入りで細かく指示している。また、「漏らすな一燈爆撃的」などの記載がある。



「防空必勝の誓」では「命を投げ出して持場を守ります」「最後まで戦い抜きます」など、空襲時の心構えが記され、国民



の防空思想や戦争の継続の意志の高揚が図られた。当時は、「焼夷弾は訓練と防火準備さえできておれば、婦人一人でも十分消火することができる・・・」と焼夷弾攻撃への理解が乏しく、防空思想と相重なって多くの犠牲者を出すことになった。

平和記念館「常設展示コーナー」で展示中

参考：「高松空襲戦災誌」 高松市役所

編集メモ

戦後80年以上が経ち、空襲を経験された方から直接話を聞く機会も難しくなっており、だんだんと高松空襲の悲惨な出来事が忘れられていくのではないかと懸念されます。平和の尊さや平和への感謝の気持ちは、戦争の悲惨さや非情さ、そして想像を絶する当時の苦しい生活のことを知ってはじめて感じるもの、わかるものだと思います。

本館で平和について学んでいる小中学生、来館される戦争を経験していない方たちに、少しでも高松空襲のことを知ってもらいたい、伝えていきたい、そして、改めて“平和”について考えてほしいと思っています。



たかまつミライエ

高松市平和記念館（たかまつミライエ5階）

開館時間：午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

休館日：火曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始12/29～1/3

入館料：無料

▼ホームページアドレス（平和啓発の推進事業がご覧いただけます）

<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/kurashi/shinotorikumi/jinken/keihatsu/heiwa/index.html>



▲QRコード

▶次回102号発行は、2027年1月です。

防空法

【読み】ぼうくうほう

【分類】戦時中の生活

昭和12年3月30日成立、同年10月1日施行。この法律は、敵機の来襲によって生ずる惨禍に備え、空襲の危険の防止と、その被害を軽減するためのもので、地方都市には設備資材の整備や防火・防空訓練の計画・実施、また各家庭には灯火管制が義務付けられた。その後、戦況の悪化に伴い、空襲時の消火義務などが追加された。

空襲による民間人の死者は約60万人、そんなに多くの犠牲が出た背景には、「逃げずに火を消せ」、つまり、空襲の危難を避けるための退去を禁止した防空法による統制と「空襲は怖くない」、例をあげると、火叩きによる消火方法の奨励などの非科学的な情報による統制があった。当時の政府は、人命よりも、国民が戦争協力に消極的になることを恐れており、国民の防空敢闘精神の醸成に注力していた。防空法は、何を守るためのものだったのだろうか。

参考：「高松空襲戦災誌」 高松市役所

：「人貴キカ、物貴キカ」

水島朝穂（早稲田大学法学学術院名誉教授）